No. 49

1986年10月15日

月刊

RIPPLE

【発行】 ¥500
リプル・セイリングクラブ
〒238-03
神奈川県横須賀市長井 2−11−1
☎ 0468−57−1711

寿特別ヨットレース

9月15日（月）。小雨降る長浜は燃えた。
前日結婚式を挙げた長谷川夫妻を祝うべく、第24回のリプルカップが、寿特別として開催されたのだ。

参加22艇、うち半数以上をシーホッパーでしめたレースフリートは、遠く北海道で行われているはずの、全日本をもしのぐ、熱気につつまれた。
現在、サルジニアカップ出場中の大久保からは、こわれた公衆電話から、国際電話がはいり、YSA長浜フリート野村氏からは「おめでたい日だからさー、オレがコミッティーやってやるよ」との申し入れもあり、友情の輪はさらに広がった。

記念すべき日に優勝を、と意気ごむ長谷川。
それを追う、ライバル赫本は、たとえ小学生と戦う時でも全力を尽す、と言うクールなレーサー。
そして、華を持たせるふりをしつつ、負けるつもりはまったくない非情の男、高槻。と、新郎の前途は暗い。

う、スループ艇では最近うわさの、杉田／ひろみ組、佐藤／チャッ組、野口／吉田組と、カップルでの出場が多く、新婦ヨッコも子持ちで安全な正田氏と、ホビー16に乗り込んだ。

さて、第一レーススタート。
スタート前に吹いていた風は落ち、各艇ちょっとガックリ。
2年ぶりに出場の山田選手、スッポーンと快心のスタートを切る。
リプルカップの初期、連戦連勝であった“微風の山田”、しばらく女にうつつを抜かしていたようだが、今だ健在。
負けじと、長谷川、赫本もこれを追う。
高槻、長崎、磯／渡ら、他のCクラス選手は5位以下と遅れをとり、レースは混戦模様。

浜で熱心に応援する彼女の方を、ちらちらと見やる“スケベ”山田をジリジリと追い上げる長谷川、赫本両艇は、最終下マークでこれを捕え、逆転！
さらに、最近伸張著しい大木も、これにつづく。
結局、第一レースは、長谷川、赫本、大木、山田、藤田（FE）の順でフィニッシュした。

つづく第2レース。コミッティー、野村氏をして、「えれー燃えんだもんなー。」と言わしめる白熱ぶりで、ゼネリコ1回のスタート。
艇団は左海面へつっかけるが、早めにタックして右海面へ出た艇がトップグループを形成した。
第一上あたりからスルスルと船足を伸ばした赫本、ダントツでトップフィニッシュ。以後、長谷川、福山、正田／ヨッコ組、高槻らがつづけてゴールに滑り込んだ。

このレースでは新人類軍団、ファーイーストの“赤ベコ”市川が大ハッスルで5位。リプルの高橋も、レース初出場ながら9位と、大健闘。なんたって“長老”長崎に勝っちゃたんだから、すごい学生パワーと言えよう。
第一レースで健闘した大木は、下マークでの混戦に巻込まれ、11位と大きく後退。佐藤／チャッ組もドンベの方に落着いた。

《総合成績》

優勝は長谷川、赫本が同ポイントで分け合った。
そして、かなりポイントは放されたが、高槻もCクラスの意地で3位に。4位の山田はBクラスで優勝。8位、10位と振るわなかった長崎、磯／渡らCクラスをしりめに、ランクアップに王手をかけた。

6位には大木と同ポイントで“赤ベコ”市川が入り、大健闘。老けた顔をしているがまだ大学生である。
Aクラスでは、高橋、平川、腹村がそれぞれ1、2、3位と、頭角をあらわしてきた。
鈴木、宮本らアンコ形選手には今一つ風が欲しかったようだ。

まずはレースの話を2つほど…。

いやー今月は原稿をいっぱい書きすぎちゃった感じ。

10月12日、よく晴れた秋の1日。第25回リプルカップがしつこく行われた。
すばらしい風、透き通った水、まさにスポーツの秋にふさわしく、すがすがしい1日の始まりを感じさせるのだ。

このところ波に乗る大木、それを追うニューフェイス高橋。さらに、高橋がつれてきた、期待の新人渡辺ら、ホッパー、レーザーばかり17艇の出場だ。

第1レース、全艇一斉にスタート。やはり長谷川、大木らが勢いよく飛びだした。
下マークを廻るころから風が落ち始め、三戸浜フリートの赤羽、長浜フリートの相庭、内藤らレーザーフリートが前へ出る。
「ネエネエー、あの人速いわよー。」
と、コミッティーのひろみちゃんが目ざとく見つけた新人、渡辺もグングン前へ出る。
上位集団は混戦模様のうちに、赤羽、渡辺、相庭、内藤、大木、長谷川の順でかたまって、秒きざみでフィニッシュへなだれ込んだ。それにつづけて高橋も入り好調な出だし。

第2レース。風はブリブリに落ちてしまったが、そよそよと吹いて来たわずかな風でスタート。
ほとんどの艇は右海面へ向かうが、左からの風をつかんだ杉田、渡辺らが、一早く上マークへたどりつく。
スタートで大幅に遅れをとった高橋もこの風をつかみ、他艇に追付いた。

その後、サイドマーク付近で再びダンゴになった全艇はフラフラしながら下マークへ。風は南へまわりながらも、ピタリとやんでいる。
下マークを廻ってからフィニッシュと、コース短縮に決まり、誰が最初に下マークにたどりつくか、まったくわからない状態となった。
南からの風に期待してコースの外に艇を出す者。又、内側につっこむ者。各自の思惑を乗せて艇は漾う。

結局、何も考えずに真ん中にいた三戸浜フリートのシーホッパー難波がスルスルと抜けだし、トップフィニッシュ。
2番手で下マークを廻ったイタリア帰りの大久保は、その後のわずかな距離で6位まで転落。かわって渡辺、高橋、長谷川らが入った。
第3レースは無風のためノーレース。
2−2と、トリッキーな風の中、抜群の走りで渡辺が初出場、初優勝を飾った。
「あの人、はっやいもーん。杉ちゃんなんてぜんぜーんだめよー。」
と、ひろみちゃんは語っていたが、4位の高橋と共に、杉田もBクラスへあがった。

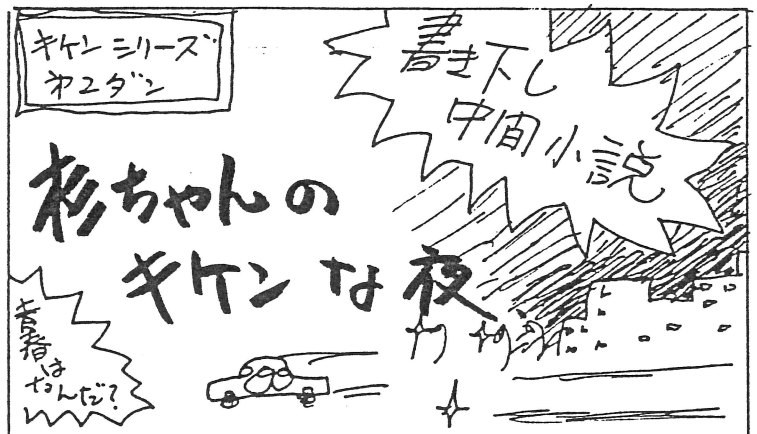
レース後、当日子供の運動会参加の為、欠場していた赫本氏より電話が入ったのは言うまでも無い。
赫「で、長谷川君カンタンにまけちゃったわけ？」
長「えー、いろいろと言いたい事はあるわけですけど・・・。
カンタンに言うとそーゆーことですね。」
赫「で、そいつ速いの？」
長「えー、僕としてもいろいろ言いたいことはあるわけなんです。」
赫「ギソウは？」
長「いろいろと言いたいことは・・・。」

来月ももちろんレースがあります。11月9日ですぞ。

キケンシリーズ・オマケン

書き下し中間小説

杉ちゃんのキケンな夜



その日の東京は、なにか異変が起きる前触れか、みょうに静まりかえっていた。

相沢道世、宮下玲子、西田ちゃっきり、野村ひろみ、以上４人、リブルを代表する、うるさい女連は、めずらしく都内に集合。そろって、酒を飲んでいた。

ふだんは、「あたし、飲めませーん。」などと、かわいこぶっているが、彼女連は実は、そこなしだったのだ。

２軒３軒とハシゴして、気ずいてみると１１時をまわっていた。そして、外は雨。シラフでもうるさい“ちゃっきり”こと西田宣子　酒を飲むとものすごーくうるさくなっていた。

「あたしさーあ、杉ちゃんに電話してくるー。」

と、言いつつ、フラフラと席を立った。

RRRRRRR

「もしもし。杉田です。」

「西田と申しますが、幸信さんいらっしゃいますか？」

「私ですが・・・・。」

「あー、あったしよー。ちゃっつっよー。わっかーるー？」

と、タイドが急に変る。

「ど、どうしたの？」

杉田幸信は、ひろみちゃんのボーイフレンドであって、ちゃっきりとは、とりたてて深い仲では無いのである。ただのヨット仲間なのだ。したがって、こんな夜更けに電話のかかってくるはずもないのだ。

そんな電話をいぶかった幸信だったが、ちゃっきりの“しり”を思い出すと、彼のコカンは熱をおびた。

「あのさーあ。今、みんなでお酒飲んでたワケー。そんで、雨もふってるしい。帰るのに困ってるのよー。ひろみちゃんとか、いろいろとおー。」

　、迎えに来いってこと？」

「あったりー！」

「よーするに、こまづかい？」

「そっ、君は“つかいっぱ”」

幸信の家は大井町である。ひろみちゃんの家は川崎なので、さほど問題はない。一瞬、ちらりと、ひろみの裸体が脳裏をよぎった。しかし、しかしである。ちゃっきりの家は大宮だ。いったい、なんで僕が大宮くんだりまで行かなきゃなんないんだ。

だいたい、あしたは、仕事じゃないか。

しかし、以前、宝石のセールスをやったこともある西田ちゃっきりに　カンタンに言い負かされ、人のいい幸信は車を走らせた。

４人の酔っ払った女連を乗せた車の中のうるささは、大変なものであった。

「ネー、見てー。スッゴーイ！」

「あ、相沢、ヨッハライましたー！！」

「うえーん。気持ち悪ーい。」

等々、訳もわからないセリフが狭い車内に充満した。

都内→大宮→下落合→横浜→川崎→大井町と回る“かわいそうな杉ちゃんコース”は、はとバスもまっさお。一人、しらふの杉田幸信は、先が思いやられた。そして、ちょっと溜息をついたし、同時に自分を哀れんでみたりもした。

しかし、大宮でちゃっきりを降ろすと、事態は一変。

残った３人の女連は騒ぎ疲れたのか、口数も少くなり、静寂が車内に流れた。

赤信号で車は止った。

幸信は、ふと横に視線を落とすと、助手席で睡り込むひろみの、のどかな横顔。

都会的な美しさの中にどこか危なげで、ほおってはおけないような愛らしさが、ただよっていた。

後の席では宮下玲子がサイドウインドーごしに片肘をついて外の街燈をぼんやりと見つめている。

その姿は、まったりとして、ふくよかで、涼しいやさしさの中にも、どこか一本筋の通った知的な輝きが、透明な宝石のように光を放っていたし、その横では相沢道世が単純にボーっとしていた。

そんな彼女連の体からは熟した果実のみが放つ、とろけるような香りが発散し、幸信の鼻孔をくすぐるのであった。

車は青信号とともに走りだした。

幸信はふと満足な気がしてきたのだ。

むりやり連れ出された真夜中のドライブ。仕事での付合いとは違った、こんな彼女連とのひととき。つまり、海の仲間としての下心の無いつきあいに、幸信は心の安らぎを憶えた。そして、幸せな気分にひたっている自分を感じていた。

夜中の都内を駆け抜けて行く車の中は、潮風でいっぱいだ。

この物語はフィクションでありますが、火の無い所には煙はたちません。

先月号で出した第５０号記念企画への原稿、杉並区の設永様を始め何人かの方からいただきました。ありがとうございます。

まだまだ募集しますので、どんな紙でもけっこうです、送ってください。

連載中の“ヨットクラブめぐり”は書くスペースが無くなっちゃたので、今月はお休み。来月は、アメリカズカップで湧かえる、オーストラリアを御紹介する予定ですぞ。

秋はジャイブでプレーニング

１０月５日。良い天気。

ビュービュー吹く風の中、帆走会を行った。

当日は初心者にはやや風が強く参加者は少かったが、藤村、鈴木ら、この夏始めた会員も元気に参加。やや沖合でビシビシとスプレーを浴びながら走り回ったのだった。

この日はマークをうってコースを作るのはやや困難であったので、ひたすらプレーニングとジャイブのスリルを楽しんだのであった。

最初は尻込みしていた鈴木、山本（章）らも、しまいには

「みんながやってるからさー、オレもやらなきゃカッコつかないじゃん。」（山本談）

とのことで、バシバシとジャイブ。すっかり自信をつけた一日であった。

このように、北っけの風の強い日は一人で走るのは危険がつきまとうので、何艇かで走る必要がある。

そんな日はまさに帆走会がうってつけ。

１１月２日の帆走会を楽しみにしていてくださいね。

《告》

こんにちは、塩野谷です。

今だに保管金を滞納する人がいます。お金だけは何が何でも期日までに支払ってください。おねがいします。

なを、滞納した場合、艇を処分することもありますので、御了承ください。

又、リブルの書籍が、２～３紛失しているようですので、心あたりの方は、戻していただきたいと思います。　以上